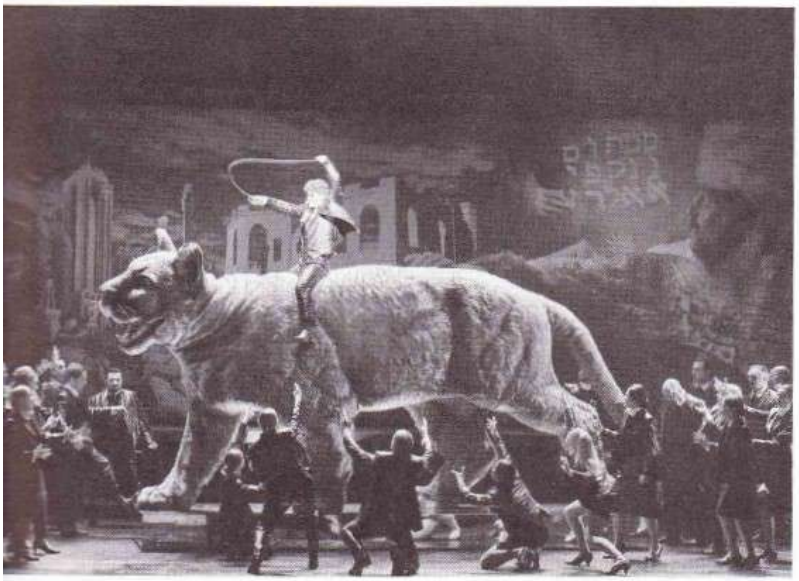
最後のルツェルン・ピアノ・フェスティバル

21年目を迎えたピアノ・フェスティバルが2019年で幕を下ろすことになった。聴衆が別れを惜しむなか、11月18日の内田光子は、オール・シューベルトで光を与え、強い優しさが際立った。「ピアノ・ソナタ第16番」から始まったリサイタルは、輪郭がはっきりした絵のように、明確に構築していく楽想と、その上に色をぼかしていくような暖かい音が心地良い。続く「第15番《レリーク》」では、太陽のような長調と、月光のような短調の2種類の光を帯び、弱音で歌う旋律はシンプルで美しく、心に強く訴えかけてくる。休憩中にその光は消え、「第21番」冒頭のテーマは光の届かない霧のなかから聴こえてくるような超弱音で主張しない。品の良い、天使のような音色の第1楽章を経て、第2楽章は、思いのほか明るい。その明るさと、旋律線に巧みに混ぜられている「ため」が心を突いて、切なくさせる。「お涙ちょうだい」の訴えではなく、自分の解釈を加えず純粋に音楽に添う彼女のピアニズムだ。最後まで旋律を誇張することなく、全体のハーモニーとして捉えた演奏が強い印象を残した。

変わって11月20日は、エフゲニー・キーシンの一音一音存在感のある音が、大きなベートーヴェンという波で会場を飲み込んでしまったようだ。生誕250周年の前祝いのように、ポピュラーなソナタが並んだプログラムは「ピアノ・ソナタ第8番《悲愴》」から始まった。第2楽章ではもっと歌ってほしかったが、第3楽章は十分聴かせた。ダイナミックな積み木遊びのような《エロイカの主題による変奏曲とフーガ》では、彼自身があまり満足していない印象を受けたが、幾何学的な構成は興味深かった。休憩後は柔らかな表情で登場すると、「ピアノ・ソナタ第17番《テンペスト》」を繊細に弾きあげ、心を打った。最後の「ピアノ・ソナタ第21番《ワルトシュタイン》」では彼の真骨頂を聴かせたが、めくるめく速さに目が回り、われを忘れているうちに終わってしまい、アンコールの2曲目ベートーヴェン《トルコ行進曲》でやっとわれに返った。

二人の若手注目歌手が登場

チューリヒ歌劇場ではまず11月3日に、ヘンデル《ベルシャザール》が初日を迎えた。ヘンデルはオラトリオとして作曲したが、楽譜にあるト書きを生かして、セバスティアン・バウムガルテンが映画的手法で舞台化した。音楽的にはローレンス・カミングスの指揮の下、高いレヴェルでこの大曲を聴かせた。キャストのなかで再注目歌手は、現在急上昇中のカウンターテナー、ヤクブ・ヨゼフ・オルリンスキだ。ブレイクダンスも踊れる28歳で、前半は目立たなかったが、後半で本領を発揮し始め、戦いに挑むため、巨大な猫の上に、命綱なしで立ったまま退場したり、フィナーレとアリアですばらしい歌唱も聴かせたりした。題名役のスイス人テノール、マウロ・ペーターは風邪を圧し、高音数カ所で苦労が見えたものの、初めてのヘンデルを歌い切った。ゴブリス役のエヴァン・ヒューズやニトクリス役のレイラ・クレールも存在感を見せた。重要な役割をになう合唱団も大活躍した。


映画的手法でバウムガルテンが舞台化した、チューリヒ歌劇場の《ベルシャザール》から ©Herwig Prammer / Opernhaus Zürich

11月17日のプリティ・イェンデ歌曲の夕べは、予想以上の出来栄えだった。譜面台を置いてシューマンを歌い始めたが、幸せを与えるオーラと輝かしい声は、1曲目の《くるみの木》から顕在だった。《献呈》では楽譜を見過ぎていたが、《蝶々》や《ことづけ》では、寸劇のような表現力と自然な温かい声で、聴衆から自然に拍手が湧き上がった。彼女の最大の問題は《森での対話》で現れた。長いレガートを保ったフレージングに欠け、ドイツ・リート特有の静けさが得られず、軽いワルツのように仕上がっていたのだ。そのレガートの弱点は続くドニゼッティ《舟人》でも見られたが、同《糸巻き》では楽しそうな演劇性が前面に出て拍手を呼んだ。《暁》は説得力に欠けたが、フランス語版《ランメルモールのリュシー（ルチア）》では、持ち前の緊張感と自然な高音で前半のトリを飾った。

休憩後はテノールに最適のトスティを掌握していた。《理想の女》で頂点に達し、《魅惑》にも心があふれていた。最後はR・シュトラウスで駆け抜けたあと、J・シュトラウス2世《こうもり》のロザリンデのアリアでプログラムを終えた。しかし本当のハイライトはアンコール。ロッシーニ《セビリャの理髪師》の〈今の歌声は〉では、すべてのヴァリエーションに意味を持たせ、ドニゼッティ《私は家をつくりたい》、そして《I want to be a Prima Donna》と完全な舞台だった。最後はプッチーニ《ジャンニ・スキッキ》から〈わたしのお父様〉で締めくくった。

ジュネーヴ国際音楽コンクール2019

ベネデッティ・ミケランジェリらを輩出したジュネーヴ国際音楽コンクール、第74回目の今年は、作曲とパーカッション部門で競われ、作曲部門では23カ国60人の応募者のなかから11月8日、4年ぶり2人目の日本人として高木日向子が、コロンビア人のダニエル・アランゴ・ブラダと共に優勝し、1万5000スイス・フランの賞金を獲得した。併せて高木は「学生賞」を、ブラダは「観客賞」と「若手聴衆賞」も受賞した。作曲課題は、来年のオーボエ部門課題曲で、審査員には細川俊夫も名を連ねていた。